

自然主義文学 盛衰史

映画文学人生論

正宗白鳥 (1879--1962)

『自然主義文学盛衰史』 (1948) 「風雪社」

『内村鑑三』 (1949) 「細川書店」

『文壇五十年』 (1954) 「河出書房」

『このごろ疑問に思ふこと』 (1960) 「読売新聞」

たゞ、私などは衰微し、没落しつゝある所謂「純文学」なるものに或る郷愁を覚えてゐる。

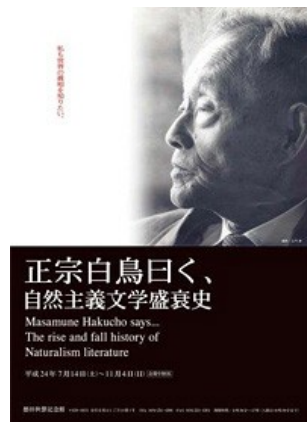
文学とは何ぞや——正宗白鳥『自然主義文学盛衰史』を読むと、文学のうちの純文学がどのような代物かがすこしわかる——ような気がする。

正宗白鳥は明治十二年生まれ、いわゆる自然主義文学者のなかでは長生きをし、昭和三十七年、死の直前に牧師の前で「アーメン」といって、キリスト教徒として死んだ。その二年前、「このごろ疑問に思ふこと」と題して、純文学への郷愁をもらしている。

「所謂純文学なるものが衰へて、大衆文学が威勢を揮ふやうになつたのであらうか。世相の変遷は如何ともし難いのである。たゞ、私などは衰微し、没落しつゝある所謂「純文学」なるものに或る郷愁を覚えてゐる」。

白鳥がいう純文学は自然主義文学と重なっているが、すでに昭和三十年半ばには彼のいう純文学は何かしら郷愁を誘うものだったようだ。

白鳥によれば、小説は面白くなくつてもいゝもの、或ひは面白くてはいけないものと、作家が感ずるやうになつたのは、自然主義思潮が起つてからだという。ただし、それは日本的な自然主義であり、ゾラ、フローベル、モーパッサンなどフランスの作品が、憂鬱だの陰惨だのと云つても、絢爛であり、闊達であり、日本のそれのように、じめじめした薄汚さはない。



映画文学人生論

自然主義文学盛衰史

また、ロシアのツルゲーネフやイギリスのワーズワースも自然主義で、見方によっては（坪内逍遙と森鷗外との没理想論争のような見方）、シェイクスピアでさえも自然主義作家といえる。

日本の自然主義作家としては、田山花袋、島崎藤村、国木田独步、岩野泡鳴、徳田秋声などがいるが、作風はみな違う。白鳥自身は、「自ら自然主義作家をもって任じたことはなかった。他人にそう極められただけ」という。

また、夏目漱石と森鷗外は自然主義作家の仲間には入らないが、漱石の『道草』や鷗外の『渋江抽斎』は自然主義の影響を受けている。永井荷風の『地獄の花』はフランスのゾラを真似たものであり、漱石門下でも森田草平の『煤煙』や長塚節『土』などは自然主義の作品といってもよい。

小説中の私と作者を同一視するようになったのは、自然主義以来の事で、「私小説」が文学中の一種として分類されだしたのは、大正以後だ。武者小路実篤や志賀直哉などの白樺派、芥川龍之介や菊池寛ら新進作家も私小説を書いた。

日本の自然主義そのものは藤村の『破戒』や花袋の『蒲団』が注目を浴びた明治末期の二、三年もてはやされたにすぎないが、大正時代から盛んに発表された私小説の時代をふくめると、純文学として細々と続き、現在に至っている。

私などは、詩や歌には門外漢の無風流な作家であつた

正宗白鳥